

業平「詞足らず」歌の構文論的確認

中村 幸弘

小稿のテーマそのものが、国語国文学の世界の常識に欠けていることになるのであろうか。「月やあらぬ」歌など、例歌三首の「心余りて」が、仮に感じとれたとしても、その「詞足らず」に該当する表現は、各例歌のどの部分を指しているのであろうか。新日本古典文学大系5―以下、新大系と呼ぶ―と、新編日本古典文学全集11―以下、新全集と呼ぶ―との、『古今和歌集』^註施注を手掛かりに確認してみることとする。

第一章 「心余りて詞足らず」文の読解

『古今和歌集』^註仮名序に見る、次の一文は、どう読解したらよいのであろうか。

○在原業平は、その心余りて、^{こしほ}詞足らず。

まず、ここにいう「在原業平は、」は、〈在原業平の歌は、〉ということである。その名聞こえたる歌人を列挙して評している文章構成のなかで、その一人の歌風を述べているのであるから、「の歌」が省略されていても、それは、容易に理解できるところである。真名序には、「在原中将之歌。其情有^レ余。其詞不^レ足。」

とあって、完備した一文となっていた。

その「心」については、仮名序冒頭文「やまとうたは、人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける。」の「人の心」に近い概念であろうと、新全集はいっている。「詞」について、新大系も新全集も、とにかく「表現」と解している。「心」を「人の心」に近いとした新全集が、その「心」を「情熱」と訳しているのは、その一文を通釈した結果の訳語であろう。新大系の訳語は、「情感」である。新全集は、「詞」を取り立てて「歌を構成する用語の意」としているが、その「用語」に「術語」の意はなく、単に「表現に用いる語や語句」をいおうとしたものであろう。

ここで、注目しておきたいのは、「…心余りて詞足らず。」の「て」である。その接続助詞「て」は、(1)継起的関係も、(2)並立的関係も、(3)順接の関係も、(4)逆接の関係も、いずれの文法的機能も有していて、この「…心余りて詞足らず。」の「て」は、そのいずれにも読みとれなくはないからである。したがって、この一文だけで、その文章を読みとることは、極めて困難であるが、この一文の文章は、その範囲に限られる、

ということでもあったのである。

そこで、新大系のその部分は、「こころ（情感）はあふれるほどだが、表現することは未熟で足りない（という）」と読みとっており、新全集のその部分は「情熱がありすぎて表現が不十分であります。」と読みとっている、新大系は、その「て」を(4)の逆接と解していることになり、新全集は、その「て」を(3)の順接と解していたことになる。ただ、そのいずれに従っても、「詞足らず」が、業平歌を貶している点で共通することになるのである。

「詞足らず」を「褒貶」の「貶」とする見方として、はっきりそう表明していたのは、金子元臣著『古今和歌集評釈』（明治書院・明治四十一年）であった。「その心余りて」は、上の、多くの人の歌の、心を得ぬにさし当てたり。これ褒なり。「詞足らず」は趣向感情余りありて、詞のいひ足らざるをいふ。これ貶なり。」とあったのである。その「上の、多くの人の歌の、心を得ぬにさし当てたり。」が、遍昭以外に誰を指すのか、特定できないが、とにかく、業平歌評に先立つ遍昭歌評の解説から、「褒貶得失」の評言が続いているので

ある。

窪田空穂著『古今和歌集評釈』（東京堂・昭和三十五年）は、この部分を、仮名序冒頭文と結びつけて、「心」と「詞」との調和・不調和をいうものと解していた。「その心余りて、言葉足らず。第一の、心と詞の調和不調和を標準にして、不調和だとしたもの。」と注したうえで、「在原業平は、その心の方が余って、詞の方が足りない。」と通釈している。その「て」の文法的解釈は、(1)の継起的関係とも(2)の並立的関係とも読みとれようか。

「…心余りて詞足らず。」文については、なお幾つかの読解に接していたようにも思うが、その「詞足らず」については業平歌を貶しているというか、非難している評言と見るのが、現行の理解の大勢と見てよいようである。近年殊にそう受け止めるよう、努めているかにも感じとれるのである。新大系のいう「未熟で」が具体的にどのような事柄を意味するかはともかく、表現についての不十分さや足りなさとする点では、新全集も共通していたからである。

第二章 施注が回避されてきている例歌三首

仮名序の業平歌評には、続けて、文末を「…がごとし。」で結ぶ比喻の一文が添えられている。中国の文学論の表現体裁を真名序が模倣した「如三」が仮名序に及んだと見られる体裁である。そして、さらに、そこに、古注として書き込まれたものと見られる、例歌三首が並んでいる。現行の諸活字本は、活字のポイント数を落として組むのが慣行となっている。仮名序の六歌仙歌評部分は、等しく、その体裁となっている。ここで、改めて、業平歌評の第一文からその末尾までを引くこととする。

在原業平は、その心余りて、詞たらず。しほめる花の色なくて匂ひ残れるがごとし。

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

大方は月をもめでじこれぞこの積れば人の老となるもの

寝ぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなもなりまさるかな

右の、業平歌評と例歌三首とを見て、直ちに確認したいと思つた事柄は、その例歌三首のどこに「心余りて」が感じとれるか、その例歌三首のどこに「詞足らず」が読みとれるかであった。世代的にいつて、筆者の、その確認したい思いは、日本古典文学大系8『古今和歌集』（佐伯梅友校注／岩波書店・昭和33年）を通過して湧いた質問であった。日本古典文学全集7『古今和歌集』（小沢正夫校注／小学館・昭和46年）が登場するまでに、金子元臣『古今和歌集評釈』／窪田空穂『古今和歌集評釈』なども眺めていたが、その質問に答えてくれる施注の類を見ることはなかった。この例歌三首を書き入れた古注は、それらによつて、「心余りて詞足らず」を具体的に理解させようとしたのであろうが、その三首のどの表現部分が「詞足らず」に該当するのか、どのような語句の省略なのか、さらには飛躍なのか、そのような解説が見えないことに不満を覚えたのであった。

その例歌三首のうち、殊に冒頭に引かれる七四七番歌の「月やあらぬ」歌については、その一首が、『古今和歌集』歌としても、また、『伊勢物語』四段に見

る一首としても、高等学校生徒向けの教科書教材として登場するところから、その「詞足らず」の具体的な生徒向け解説の必要性を強く感じたのである。各教授資料は、そこに警戒することなく、わざわざ、仮名序において「心余りて詞足らず。」と評されている一首であるなどと、添えていたからである。教室でそう紹介したら、「その心余りて」は漠然と感じとれても、「詞足らず」は、「具体的にどのような文の成分の省略なのか。」など、生徒からの質問が集中するのではないか、そういう不安に駆られた日もあった。

とにかく、『古今和歌集』仮名序として述べられている「心余りて詞足らず。」という本文に即して、その「詞足らず」について、どのような「詞」の不足を指しているのかなど、例歌三首の表現と結びつけて説明する施注の類には、まったく出会えなかった。あの松田武夫著『新釈古今和歌集 上巻』（風間書房・昭和43年）も、その部分の注は、「心余りて一詩的感動は十分にあふれて。歌を「心」と「詞」とに分析する考え方は、冒頭の和歌の本質の説明部分にも見られる。（以下、略）」とあるだけで、「詞足らず」につい

ては、立項もしていなかったのである。

日本詩人選6に収められた目崎徳衛『在原業平・小野小町』（筑摩書房・昭和四十五年）は、テキストでも注釈書でもなく、研究書でもない、一般読者に向けての読み物である。国歌大観番号順に、業平歌物語が語られている。そこで、「心余りて詞足らず」の例歌としては三首めである六四四番歌が、他の二首よりも先に取り上げられることになった。典型的な後朝きんぎょの歌で、即興を書き送るところから、掛詞も縁語も用いない単純な詠み口だ、という。そこで、業平特有の「その心余りて詞足らず」が見られるとして、本居宣長『古今集遠鏡』の解とくを引いていた。

実は、かねてから、宣長が、一首そのものには表現されていない語句を想定して口語訳する際、そこに傍線を引いて補った部分を明らかにした、その訳出法に注目していて、文の成分の省略について観察したいと思っていた。早速、その「心余りて詞足らず」の例歌三首がどう訳出されているか、照合してみた。六四四番歌については、その右側傍線部分が三か所あって、そこが「詞足らず」部分といってもよいことになろう。

七四七番歌についても、その右側傍線部分が六か所もあって、これまた、そこが「詞足らず」部分といえることになろう。しかし、八七九番歌には、その右側傍線部分が、一か所もなかったのである。

そうではあっても、目崎徳衛『在原業平 小野小町』の、その視点は、業平「心余りて詞足らず」例歌の、「詞足らず」の具体的な確認に、一つの方向性を与えてくれる契機となった。さしあたっては、それら例歌三首の偏らない読解に従って、どのような文の成分が情感としては存在しているも、言語としては表現されていなかったかを確認し、整理する作業を思い立つこととなった。その例歌三首を古注として書き入れた先人が、貫之の述べた「在原業平は、その心余りて詞足らず。」をどう理解して、その三首を例歌としたのか、さらには、貫之は、どのような業平歌を想定して、その評言として「在原業平は、その心余りて詞足らず。」と述べたのか、など、探る手立てのない、先行する過程が、その奥に見えてくるのである。

その後、今井源衛『在原業平』（集英社・一九八五年）の、第六章「その和歌」（業平の歌風）にも、「心余り

て詞足らず」「詞足らず」という評言を引いて解説するところはあったが、「詞足らず」の内訳に及ぶところはなかった。さらに、それら書物のそこを読んだ日のことなど忘れるほどに年月が流れて、通勤の途次の慰めに、コレクション日本歌人選004中野方子『在原業平』（笠間書院・二〇一一年）を眺め楽しむ何日かがあった。そこに引かれた、「詞足らず」例歌三首には、その解説に、「詞足らず」という評言が引かれるところはなかった。ただ、巻末の解説「伝説の基層からの輝き―業平の和歌を読むために」には、仮名序の、その評言を引いたうえで、「逆にことは余りて心足らずのもの、いずれにもあてはまらないものもある。」ともいつていた。

その中野方子新評言が具体的にどのような事例を指しているかはわからないが、そのような新評言を見るにつけても、仮名序にいう「詞足らず」確認の必要性を改めて強く感じさせられた。昭和四十年代から出会っていた関係書目を急ぎ集めて、その確認作業を試みることとなった。

第三章 七四七番歌（Ⅱ例歌11）の〈足らざる詞〉 の確認

「詞足らず」例歌の11は、巻十五（恋五）・七四七番歌である。

○月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

右の一首について、宣長『遠鏡』は、次のように口語訳している。

○今夜コ、へ來テ居テ見レバ、月ガモトノ去年ノ月
デハナイカサア 月ハヤツハリ去年ノトホリノ月
ヂヤ 春ノケシキガモトノ去年ノ春ノケシキデハ
ナイカサア 春のケシキモ梅ノ花サイタヤウスナ
ドモ ヤツハリモトノ去年ノトホリデ ソウタイ
ナンニモ去年トチガウタ事ハナイニ タゞオレガ
身一ツバツカリハ 去年のマ、ノ身デアリナガラ
去年逢タ人ニアハレイデ 其時トハ大キニチガウ
タ事ワイノ サテモ、去年ノ春ガ恋シイ
さて、現在、一般には、次のように現代語訳されて
いる。

○月は、そして、春は、昔のままの月であり春であつ

て、自然はやはり変わらない。それに反して人は変わっていくものなのに、どうしたことか取り残されたように、わたくしのこの身だけがもとの通りの状態であって、…。(新大系)

○月よ、お前は去年の月と違うのか。春よ、お前は去年と同じ春ではないのか。あの人がいなくなっただけに、すべてが変わってしまい、かくいいう私の身ひとつだけは去年と変わらず、もとのままであつて。(新全集)

新大系は、「月やあらぬ」「春や昔の春ならぬ」の「や」を反語と見ているが、新全集は、問いかけと見ている。そうではあつても、下の句の「わが身ひとつはもとの身にして」には、「すべてが変わっているのに」という接続部を想定して展開していくので、その理解は共通はしていると見てよいであろう。以上の確認をしたうえで、筆者は、次のような語句を補つて解する一首と見ている。

○月や〔昔の月に〕^①あらぬ。春や昔の春ならぬ。〔すべて変はれるに〕^②

わが身ひとつはもとの身にして〔変はらざるな

り。〕

①「被補助語昔の月に補助語あらぬ」の被補助語「昔の月に」が省略されていると見ること、注「月や昔の月ならぬ。」文となつて、第二・三句「春や昔の春ならぬ。」文と同じ構文の一文となる。

②上の句と下の句との間に、「すべて変はれるに」という接続部が省略されていると見ること、上の句と下の句との関係が明確になる。

③第五句「もとの身にして」では不完備であるが、「変はらざるなり。」が省略されていると見ること、主部「わが身ひとつは」に「もとの身にして変はらざるなり。」が応じること、述部が完備したものとなる。新全集の「去年と変わらず、」から判断した。

以上が、七四七番歌の〈足らざる詞〉についての構文論的確認である。

第四章 六四四番歌(Ⅱ例歌2)の〈足らざる詞〉の確認

「詞足らず」例歌の2は、卷十三(恋三)・六四四番

歌である。

○寝ぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさるかな

右の一首について、宣長『遠鏡』は、つぎのように口語訳している。

○ユフベ逢テ寐タノハ　ドウデアツタヤラ夢ノヤウデアマリハカナサニ　セメテホンノ夢ニナリトモ
マイチド見ヤウト存ジテ　眠ツテミレドネラレモ
致サネバ　夢ニサヘ見イデ　サテモくイヨく
ハカナイ事ニナリマスル事カナ

さて、現在、一般には、次のように現代語訳されている。

○共寝致しました夜の夢のような不確かさがかないので、その夢をもう一度しっかりと見ようとしてうとうとしていると、ますます、まあ、不確かになつて行くことですよ。(新大系)

○昨夜、あなたと共寝をした夢のような逢瀬がはかなかつたので、家に帰つてついうとうとしていると、そのはかなさがますます胸にこみ上げてくることよ。(新全集)

新大系にいう「夢のような不確かさ」とは、〈逢う

瀬の不確かさ〉をいうのである。続く「その夢を」は、〈せめて、その夢をなりと〉ぐらいであつてくれなければならぬように思うが、いかがであろう。新全集の「家に帰つて」は、詞書から、あえてそう解したともいえよう。いずれにしても、下の句「いやはかなにもなりまさるかな」は、「夢のなかの逢う瀬」についていっていることなるう。以上を確認したうえで、筆者は、次のような語句を補つて解する一首と見てゐる。

○寝ぬる夜の夢(①のやうなる逢ふ瀬)をはかなみ、
〔いま一度夢にてなりと逢はむがために〕まどろめば、〔その夢のなかの逢ふ瀬は〕いやはかなにもなりまさるかな。

①「夢」で、〈夢のような逢う瀬〉を意味していると見たい。「夢のやうなる」という連体修飾語を冠した被修飾語「逢ふ瀬」の上に、さらに連体修飾語「寝ぬる夜の」が冠せられていることになる。その「寝ぬる夜の夢のやうなる逢ふ瀬」が「はかなみ」(形容詞「はかなし」の語幹に原因・理由

を表す接尾語の「み」が付いたもの)の主部(対象格を認める時枝文法に従えば、対象部とでも呼ぶことになるか)に相当し、「を」は間投助詞である。

②「まどろめば」には、その目的を示す評言が必要で、「いま一度夢にてなりと逢はむと思ひて」といったような語句が想定される。「いま一度夢にてなりと逢はむがために」とするなら、「まどろめば」の補充成分ということになる。

②下の句「いやはかなにもなりまさるかな」には、主部(対象部とでも呼んだらいい文の成分)が省略されている。そこに、「その夢のなかの逢ふ瀬は」が想定される。

以上が、六四四番歌の〈足らざる詞〉の構文論的確認である。

第五章 八七九番歌(Ⅱ例歌3)の〈足らざる詞〉の確認

「詞足らず」例歌の3は、巻十七(雑上)八七九番歌である。

大方は月をもめでしこれぞこの積れば人の老となるもの

右の一首について、宣長『遠鏡』は、次のように口語訳している。そこに、右側傍線部語句はなかった。

○タイガイナ事ナラモウ月モアマリ賞翫スマイヅ
コノ見ル月ガサ、アノダンくトツモレバ人ノ年ノ
ヨル年月ノ月ヂヤ

さて、現在、一般には、次のように現代語訳されている。

○一般的な気持ちでいえば、月を賞美することはすまない。この月こそは、積り積ると人の老齢になるものなのだ。(新大系)

○一般的には、私は人の愛でる月だつて愛でることはすまない。このことが積り積れば、人を老いさせる原因になるのだから。(新全集)

「大方は」について、新全集は、頭注に〈よく考えてみた結果〉と述べたうえで、三八八番歌を参照するよう指示してある。「大方は」が、以下の全体を修飾することを認識させようとするものと読みとれた。新大系脚注も、一八五番歌を参照するよう指示してい

て、「大方」が「世間一般」を意味することを認識させようとするものと読みとれた。第二句「月をめでじ」の「月」については、新大系も新全集も、ともに各注で、その上に連体修飾語が必要である、としている。新大系は、その「月」に「暦月を掛け」ている、といい、新全集は、「人々が愛でる」を補って解する」ところである、といっている。以上を確認した結果、新大系に拠った理解（A）と新全集に拠った理解（B）との二解として、それぞれ、次のような語句を補って解する一首と見ている。

○大方は「暦^①」月をもめでじ。

これ（「月重ぬること」ぞこの

積れば人の老となるもの「なれば」——A——

○大方は「世人の愛づる」月をもめでじ。

これ（「月見ること」ぞこの

積れば人の老となるもの「なれば」——B——

①AもBも、連体修飾語が省略されていると見る点で共通する。Aについては、さらに「（天体の月のみならず）暦の」月をもめでじ」と見たほうがよかつたか。

②AもBも、指示語「これ」の指示内容が表現されているわけではなく、それぞれ、深層において想定される「月重ぬること」（A）と「月見ること」（B）とを補って理解していくことになる。

③第三句「これぞこの」「これぞ」は、「人の老となるもの」の主部で、したがって、その「人の老となるもの」は、述部として、「人の老となるものなる」となつて結ばれる、係結文である。ただ一首全体からは、初句・第二句「大方は月をもめでじ。」の理由を述べていることになるので、その断定の助動詞「なり」の連体形「なる」は、已然形「なれ」にして接続助詞「ば」を添えた「なれば」とするほうが、一首の歌意が読みとりやすくなるであろう。なお、その、「この」は、「人の老」にかかつていくものと解したい。

この一首については、宣長『遠鏡』が①の補填をも無視した事情とか、「月の顔見るは忌むこと」（『竹取物語』）という俗信との関係の有無とか、問題を残すが、小稿としては、これ以上踏み込むことは控えたい。

第六章 例歌以外の業平「詞足らず」歌

古注として、例歌三首を書き入れた、その施注者は、殊に八七九番歌について、一首のどこに〈足らざる詞〉を読みとっていたのであろうか。そもそも、紀貫之は、何首ほどの該当歌を思い描いていたのであろうか。真名序が先行していたのであったとしたら、紀淑望が思い描いていた該当歌について、貫之に語ることなどなかったであろうか。以下に、七首ほど、準例歌を引いてみたいと思う。

○〔都といふ〕名にしおはばいざ言問はむ。

〔都鳥〕

わが思ふ人は〔都に〕〔今も〕ありやなしや。」と

(九〔羈旅〕・四一一)

- ①初句「名にしおはば」の「名」には、連体修飾語「都といふ」が省略されている。一般には、第三句「都鳥」から、その意を読みとっている。
- ②第五句「ありやなしやと」との空間的な関係を示す二格補充成分「都に」が省略されている。

③第五句「ありやなしやと」との時間的な関係を示

す二格非表出補充成分「今も」が省略されている。

○〔後朝の別れせし日には〕起きもせず寝もせず夜をあかしては(「あかしたる今は」)

〔春の景物の長雨を〕春のものとてながめくらしつ。(十三〔恋三〕・六一六)

①初句・第二句の一部「起きもせず寝もせず」の二格補充成分「後朝の別れせし日には」が省略されている。二格非表出の「後朝の別れせし日は」でもよい。

②第三句「(夜を)あかしては」は、(「あかしたる今は」と解せる。接続助詞「て」が係助詞「は」を伴っただけであるのに、この一首においては、時間の経過を含めた現在までを読みとることになる。

③第四句「春のものとて」は(「春のものとして」)の意で、その対象としてのヲ格補充成分「春の景物の長雨を」が省略されている。

○かずかずに思ひ思はず〔問はまほしけれど、〕

問ひがたみ、「さらに」〔雨の降るを見わづらふ君の心の

知りえねば〕身を知る雨は降りぞまされる。(一

四(恋四)・七〇五)

①初句・第二句「かずかずに思ひ思はず」に「(と問はまほしけれど」が続いて、第三句「問ひがたみ」に先行する逆接確定条件の接続部が構成されることになるので、「問はまほしけれど」が省略されていることになる。

②詞書に、業平の家の女に藤原敏行としゆきから「雨の降りけるをなむ見わづらひ侍る」と言ってきたので、その女に代わって詠んだとあるので、上の句から下の句への展開には、接続部「雨の降るを見わづらふ君の心の知りえねば」が省略されていると見なければならぬ。

③第三句「問ひがたみ」も、②において想定した「雨の降るを見わづらふ君の心の知りえねば、」も、ともに順接確定条件の接続部であるところから、その両者の間には、添加の意を表す副詞「さらに」など、を補って読んでいきたい。

○「死出の旅路は」つひにゆく道〔なり。〕とはかねて

聞きしかど、(死出の旅路への旅立ちは)

昨日今日(ならむ)とは思はざりしを。(十六(哀

傷) 八六一)

①かねて聞いていた「つひにゆく道〔なり。〕」の主部「死出の旅路は」が省略されている。

②既に引いた、伝聞の「つひにゆく道」は、断定の助動詞「なり」の終止形を添えて、述部として完備することになる。

③第四句「昨日今日とは」の「昨日今日」は心内文のなかの語句で、断定の助動詞「なり」の未然形と推量の助動詞「む」の終止形とが結びついた「ならむ」などを添えて、述部として機能しているものと読みとれる。

④第四句「昨日今日とは」の「昨日今日」が、心内文のなかの述部として「昨日今日ならむ」と読みとれた段階で、その上に主部「死出の旅路への旅立ちは」が省略されているものと見えてくる。

○大原や（^①大原野の社守れる）小塩の山も

〔二条の後の参詣の盛儀の決まりたれば〕今日こそは

神世のこと（^③藤原氏の祖神の仕へし天孫降臨の光景）も思ひいづらめ。（十七（雑上）・八七一）
①「大原や」の「や」は詠嘆の間投助詞だが、『古今和歌集』では「…にある」の意で下の地名に続く用例を見る。そこで、第二句「小塩の山も」の「小塩の山」にかかる連体修飾語〈大原野の社守れる〉の意に読みとれる。

②第三句「今日こそは」の前提として、詞書にいう「二条の後のまだ春宮の御息所と申しける時に、大原野にまうで給ひつる」が関わって、接続部「二条の後の参詣の盛儀の決まりたれば、」が存在するものと読みとれる。

③第四句「神世のこと」の「神世のこと」は、『古事記』『日本書紀』に記される藤原氏の祖神アマノコヤネノ命が皇祖ニギノ命に従って天上界から日本に下った事蹟を指していることが、読者の深層にある日本文化の教養から読みとれる。した

がって、この「神世のこと」には、〈大原野神社の祭神アマノコヤネノ命の具体的な史蹟〉が省略されていると見ることがができる。

○今ぞ知る。〔人待つことは〕くるしきもの〔なり。〕と。

〔君は、〕人（^④君）待たむ

里（^④彼女の家）をば離れずとふべかりけり。（十八（雑下）・九六九）

①心内文〈くるしきもの〉には、主部（人待つこととは）が省略されている。詞書から、送別会を開こうとしても、その主人公の紀利貞があちこちの女性宅を歩き回っていて、夜更けまで姿を現さなかつたことが読みとれるからである。

②右の確認に併せて、想定した主部「人待つことは」に应じる述部は、「くるしきもの」が断定の助動詞「なり」の終止形を伴って、完備することになる。以上、初句・第二句は、倒置法をもって、詠者自身が認識した事柄を確認していることとなる。

③第三句第四句・第五句の一文は、利貞に向けての勧告である。その冒頭には、述部「とふべかりけり」の主部「君は、」が省略されている。

④第三句「人待たむ」がかかっている「里」までの「人待たむ里」で、利貞が通っていく女性の家を指しているのです、その「人」は、利貞を指していることになる。その利貞は、詠者業平からは「君」ということになる。

⑤既に、「人待たむ里」については、④において、利貞が通っていく女性の家というように確認してきている。「彼女の家」といつてもよからう。

○忘れては(＝忘れたる今は)〈いま、ここにあらは)夢(なる)か。とぞ思ふ。思ひきや。〔我〕雪踏みわけて君(＝頭おろしたる惟喬親王)を見む)とは(十八(雑下)九七〇)

①六一六番歌の②に倣って、〈忘れたる今は〉と解せる。

②第二句「夢かと思ふ」の「夢か」は心内文で、「夢〔なる〕か。」の主部「いま、ここにあらは」が省

略されていると読みとれる。

③右の②の確認に併せて、主部「いま、ここにあるは」に應じる述部は、「夢〔なる)か。」というように、「夢」の下に断定の助動詞「なり」の連体形「なる」を用いることによって完備することになろう。

④「思ひきや。〈：〉とは」という倒置法に併せて用いられている心内文のなかには、「：踏み分けて、見む」という複数述部の主部「我」が省略されていると見えてくる。

⑤詞書から、その「君」は、「頭おろしたる惟喬親王」と読みとることができる。

小稿は、例歌三首と併せて、都合十首について、その〈足らざる詞〉を確認した。『古今和歌集』に載る業平歌三十首のうち、少なくとも十首に「詞足らず」歌という傾向が顕著に見られたことになる。ただ、宣長『遠鏡』に見られるとおり、『古今和歌集』歌に広く見られた傾向であったろうとも見えてくる。

念のため、その構文論的確認に用いた図解の符号に

ついで整理しておくこととする。「」は、当然、会話を示す符号である。会話文に準じる心内文だが、特定の符号はないので、へ を用いることとした。

は倒置法表現の正序表示の符号で、広く採用されている。以上は、読解のための符号で、今回、「詞足らず」歌の〈足らざる詞〉を示すために用いたのは、次の二符号である。その一は、省略語句を示す「」である。その二は、指示内容や同意内容を示す（〳）である。

第七章 二六八・九二三番歌についての、小沢正夫

鑑賞批評

実は、小稿のそもそもの契機は、全集―日本古典文学全集『古今和歌集』―本『古今和歌集』の訳に続く鑑賞批評の記事にあったのである。少なくとも、前章の第六章以前に、本章の事実確認があったのである。

その鑑賞批評は、二六八番歌と九二三番歌ついでのもので、その各首に、「詞たらず」の実例と見ようとしているのであった。「仮名序」において、それが後人の書き入れであったとしても、現存の諸本には、例

歌三首として定着しているのである。その例歌ではない業平歌二首に、「詞たらず」に相当するといふ評言があったのである。確かに文構造が理解しにくかったり、倒置法表現であったりするが、文の成分の欠落はないといってもいい表現なのである。そこで、前章の確認作業を試みたのである。

そこで、小沢の鑑賞批評にいう「詞たらず」歌について、その鑑賞批評を添えて引いていくこととする。

○植ゑし植ゑば、「秋なきときや咲かざらむ。」花こ

そ咲かめ、根さへ枯れめや。(五(秋下)・二六八)
 やや耳慣れない語法を用い、切迫した調べをかもしだしたところは、いかにも業平らしい。「仮名序」でいう「詞足らず」の歌であろう。菊の花の最初におかれたこの歌は、秋に先立って詠まれたからなのであろう。

この一首には、「人の前栽まへざいに、菊に結びつけて植ゑける歌」という詞書があって、菊の花を詠んでいる一首である。その「植ゑける」については、諸説あって揺れているが、ここでは無視する。そして、第二二三

句の「秋なきときや咲かざらむ」についても、諸説あつて揺れているようである。右の鑑賞批評にいう「やや耳慣れない語法」とは、その第二・三句を指しているものと思われる。頭注に「秋なき」は少し無理な語法。「や」は軽い問いかけで、肯定の答えを予想する。」といたりしている。そこで、その第二・三句を除くと、実に明快なのである。

○植ゑし植ゑば、花こそ咲かめ、根さへ枯れめや。

(訳) 一度植えられたら、花は散ることがあるだろうが、根まで枯れることがあるうか、そのようなことは ないだろう。

右の「花こそ散らめ」は挿入文とみるところではあるが、「……こそ……め」の「め」の下に逆接確定の接続助詞「ど」を補つて、接続部と見てよい文の成分である。したがつて、右の一文に、省略は存在しないのである。そして、取り除いてあつた一文、「秋なきときや咲かざらむ。」をこそ、挿入文「秋なきときや咲かざらむ、」とみることができよう。すると、「花こそ見らめ」は、逆接仮定に読めてきて、〈花は散ることがあつても、〉と訳し改められて、つぎのように通釈すること

とができよう。

(通釈) 一度植えたら〔秋がない時(Ⅱ年)には咲かないだろうが、〕花は散ることがあつても、根まで枯れることがあろうか、そのようなことはないだろう。

新全集も、右の二六八番歌の鑑賞批評は、ほぼ同じである。いや、その部分は「詞たらず」歌の実例といえよう。」となつていて、その姿勢を強めている。そうではあるが、一般にいう文の成分の省略は見られないのである。

○抜き乱る人こそあるらし。白玉の間なくも散るか。

袖のせばきに、(十七(雑上)・九二三)

末句は滝の水が多いことをいったもので、一首は叙景の歌であらう。この太根の歌にも「心余りて、詞たらず」という業平の特色はよく出ている。

右の一首にも、「布引の滝のもとにて、人々集りて歌よみける時によめる」という詞書がある。初句・第二句は、それで一文である。「こそ」の結びとなつているので、その「らし」は已然形である。第三・四句

と第五句とは、倒置法表現となっている。第五句「袖のせばきに、」は接続部で、第三・四句「白玉の間なくも散るか。」の上に正序して読むことになる。以上の確認によって、一首は、次のように通釈することができる。

(通釈)「糸から」引き抜いて乱し(＝散らし)て
いる人がいるらしい。袖が狭(くて拾えな)
いのに、白玉がひっきりなしに散つ(＝
降つ)てくることよ。

九二三番歌の鑑賞批評は、全集も新全集もまったく同じである。通釈に若干(「」部分を入れてみたが、無視してよい補足である。

右二首について、単純な読解を試みたところからは、そこに文の成分の欠落など、一般に言う表現の不足といえるほどの批評を受ける箇所は認められなかったようである。そうではあっても、読み誤られる不安のない、完備している表現とはいいがたい二首である。それほどに、業平歌は、そのいずれにも、「心余りて詞たらず」といえてしまうところがあつた、ということ

になるのであろうか。とにかく、右二首についての、小沢鑑賞批評が、前章の確認作業の契機となつたのであつた。

第八章 暗黙の理解を期待する「詞足らず」という

表現

単刀直入にいつてしまえば、仮名序の業平歌評にいう「心余りて詞足らず。」の「詞足らず」は、そもそもが、具体的な内容の特定できない表現だったのである。既に見てきているように、新大系の〈未熟で足りない〉からも、新全集の〈不十分であります〉からも、その具体的な難点は、何も見えてこないのである。貶している点では共通していても、和歌としてどのような不備があるのかは、一定の歌論の素養のない者には見えてこないのである。したがって、その例歌三首にどのような不備があるのかなどの施注がないのも当然だったといえはいるのである。

仮名序冒頭二文にほぼ相当する真名序冒頭三文の、その三文めの「感生_三於心_一。詠形_三於言_一。」が『詩経』(大序)の「情動_三於中_一。而形_三於言_一。」に拠つてい

るなど、古代中国詩論の影響を受けているという。平安時代歌論としての仮名序の表現も、その「心」と「詞」との二元論をもつて構成されているのであろうが、そして、それが、この六歌仙歌評部分にまで及んでいるのであろうが、その業平歌評部分においては、「…心余りて詞足らず。」とあるだけなので、具体的な内容が見えてこないのである。

小稿は、その「詞足らず」歌について、宣長『遠鏡』に見る右側傍線部語句の存在に結びつけて、強引に、その省略語句の確認作業へと展開させてしまった。もちろん、その契機は、目崎『在原業平 小野小町』の、「詞足らず」例歌の2に相当する「寝ぬる夜の」歌の解説に見たそれであったが、その業平歌物語は、例歌の1や例歌の3に及ぶものではなかった。その例歌の3については、宣長『遠鏡』そのものに右側傍線部語句がなかったのである。ただ、筆者が試みた構文論的確認では、二か所の省略語句と、指示内容補填語句一か所が確認された。しかも、その省略語句一か所と指示内容補填語句については、それぞれに二説あって、それらをも含めて、「詞足らず」と見たのか、と思

たくもなつたのであった。

それにしても、新大系は真名序の「其詞不_レ足。」には〈それを表現することは十分でない〉としながら、仮名序の「言葉足らず」について、あえて、どうして、〈表現することばが未熟で足りない〉と訳出しているのだろうか。「足らず」そのものに〈未熟である〉意を読みとけることは理解できる。ただ、この業平歌評部分で、理由も添えることなく、そう訳しているのは、本文の「足らず」にふさわしい読者の暗黙の理解に期待してのことなのであろうか。

そんなことを遠い昔のことと想っていた筆者に、中野『在原業平』に見られたパロディ「ことば余りて心足らず」が、魯鈍な筆者ゆえに悩むことになった「詞足らず」難語譚告白の機会を与えてくれた。「詞足らず」をどう解しての「詞余りて」であるか、お教えいただけますか、とも思つたからである。

注

- ①新日本古典文学大系5『古今和歌集』（小島憲之 新井栄蔵校注／岩波書店・一九八九年）と新編日本

古典文学全集11『古今和歌集』（小沢正夫 松田成穂校注訳／小学館・一九九四年）とで、『古今和歌集』歌の現行の理解の大勢を見ようとしたまでのことである。なお、小稿引用の『古今和歌集』歌については、特に断らない限り、新全集本に拠ることとした。

②新全集に拠った。以下、『古今和歌集』本文の引用は、すべて、新全集本に拠ることとする。

③いま、『日本語文法大辞典』（山口明穂 秋本守英編／明治書院・平成13年）の「て（接続助詞）古語」（糸井通浩執筆）の意味分類のなから、「心余りて詞足らず。」の「て」として読みとれる意味説明だけを引くこととした。

④『本居宣長全集 第三卷』（筑摩書房 昭和四十四年）の解題（担当編者・大久保正執筆）には、「訳文と原文との構成が相違する場合には訳文に数字を付して両者の関係を示し、補説部分には右側に傍線を引いて示すなどの用意を施してある。」と紹介してある。

⑤被補助語「昔の月に」の「に」と補助語「あらぬ」の「あら」とが融合して、「昔の月ならぬ」となり、「月や昔の月ならぬ」という一文になるものと考え

る。筆者は、「春や昔の春ならぬ」文について、「春は、昔の春にやはあらぬ。」を原形と見て、その漸移の深層について追跡を試みた。「月やあらぬ」歌の疑問点（『國學院雑誌』第一一三卷第十号・平成二十四年）／「春や昔の春ならぬ」文の生成（『國學院雑誌』第一一四卷第五号・平成二〇〇五年）（『月やあらぬ』歌の生成）として、『和歌構文論考』（新典社・平成26年）の第二章に収録）——ことがあるが、小稿においては、「春や昔の春ならぬ」で一定の文意が読みとれるものとして取り扱った。

⑥日本古典文学全集『古今和歌集』（小沢正夫校注・訳／小学館・昭和46年）。新全集『古今和歌集』は、全集の段階では協力者であった松田成穂が小沢と共著者となった。したがって、新全集の校注訳には、全集と変わらないところも多い。

⑦新大系・新全集とも、仮名序のそれぞれの注に、その典拠としての真名序の該当部分が紹介されており、それぞれの巻末の解説にも取り立てられていて、それは、『古今和歌集』を読解する常識ともなっていよう。

⑧ 具体的に、どのような事例をお考えなのかは、わからない。言葉の綾でおっしゃったのかもしれない。国語国文学の素養に欠ける国語科教員としての筆者は、「消えずとも」といえるところを「消えずはありとも」と詠む『古今和歌集』六四番歌、「起きず寝ず」といえるところを「起きもせず寝もせ」と詠む『古今和歌集』六一六番歌などが浮かんできた。

ただ、業平は、これら表現で、それまで表現しえなかった世界を描写しえていて、「心足らず」ではなく、状況詳述の描写の開拓をなしたものと理解している。併せて、補助動詞の「あり」「す」発達の契機ともなっている。したがって、その言語活動に先立っての、深層の情感も豊かであったと理解したいと思っている。